山形県生涯学習センターだより

2025.3 Vol.33

生涯学習やまがた

ネイチャーゲーム

さがえ図書館まつり

赤い羽根共同募金

企画会議

表彰を受けました！

CONTENTS

❷ 特集
山形県の社会教育の歴史
―青年団の共同学習を通して―（矢口 悦子氏）

❺ あなた やまがた たからびと㉑
土屋明美さん（白鷹町）

❻ このまちに注目！
デジタルアトラクションイベント「あそび×まなびパーク powered by Little Planet」
寒河江市高校生ボランティアサークル「チェリーズ」

❼ 事業報告
パワーアップセミナー/生活支援コーディネータースキルアップ研修/
山形県地域づくり実践交流集会

❽ Information
山形県生涯学習センター助成制度のご案内、第11回洗心庵写真コンテスト作品展、
遊学館ブックス最新刊『山形の歴史的成り立ち』発刊について！

寒河江市高校生ボランティアサークル「チェリーズ」

現在、中学生と高校生23名が活動するボランティア団体「チェリーズ」は、昭和60年に設立され、「地域の人とのかかわりを大切に、笑顔で楽しくボランティアをしよう」という目的のもと活動しています。団体名は、寒河江市が「日本一さくらんぼの里」として知られることにちなんで名付けられました。主体性を持ち、地域の方々を巻き込みながら、地域がさらに生き生きとすることを目指して取り組んでいます。また、学校や学年の垣根を越えた仲間づくりを大切にし、元気な挨拶と笑顔を忘れず活動しています。

→関連記事はP６へ

特集

山形県の社会教育の歴史
ー青年団の共同学習を通してー

東洋大学　学長　矢口悦子（やぐちえつこ）

山形県の社会教育の歴史的背景には、戦後の青年団や婦人会における共同学習を通した学びがあります。彼らは何を目指し、何を学んだのか、青年団活動の歴史を振り返るとともに、これからの社会における地域づくりについて、矢口悦子氏より寄稿していただきました。

はじめに

２０２４年のノーベル平和賞に、日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）が選ばれた。このことの世界史的な意味は非常に大きいと考える。同時に、私は、選考委員会が被爆者の高齢化による運動の衰退を案じつつ、若者たちがそれを引き継いでいる点を評価の一つとしてあげていたことに注目したい。若者たちによる戦争体験の継承活動は、青年団運動においても大きな柱であった。戦争の体験を聞き取り、その思いを深く受け止める活動は山形県でも引き継がれてきた。その活動を支えてきたのは、紛れもなく共同学習であった。（写真１）

社会教育における共同学習という言葉を体験として知っている人々は少なくなっていると思われる。21世紀に入ってからは、特別支援教育における専門的な用語として理解している方も多いに違いない。しかし、もともと共同学習は、第二次世界大戦後に、地域に暮らす青年や女性たち（当時は婦人会等）が繰り広げた話し合いを軸にした学びを指している。（写真２）

（写真１）山形県連合青年団平和運動のキャラバン隊（1984年）※1

（写真２）山形県内青年団の共同学習風景（1954年頃）

その共同学習は日本中で取り組まれ、数百万人の人々が経験している社会教育の本質的な姿を体現した活動であった。そして、その推進と理論的な整理をする際に中心的な役割を果たしたのが山形県の青年団であった。このことは、山形県に暮らす若い世代にはほとんど知られていないのではないかと危惧している。私は、山形県の青年団による共同学習に強い関心を持ち、学生時代に懸命に学んだ。その調査研究が契機となり、日本青年団協議会の助言者として数十年も関わることになった。

21世紀も四半世紀となる「今」、共同学習を語ることは、平和な社会を作る鍵として共同学習の持つ価値を再認識するために必要であると考えている。ここでは、そうした思いを持ちながら、青年団の共同学習について述べてみたい。

1　共同学習が必要とされた背景

敗戦後、空襲によって壊滅的な被害を受けた地域や空襲の被害はなくとも疲弊しきった地域において、戦争で家族を失った人々、かろうじて戦地から帰還した人々、さらには満州開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍として送り出され、命がけで引き揚げてきた人々、それぞれが壮絶な体験を胸に秘めながら、地域での暮らしを取り戻そうと格闘を続けていた。中には、将来への希望を失い自ら命を絶ってしまった若者もいたと記録されている。戦前に受けた教育が否定された青年たちや、新憲法の下で選挙権を獲得した婦人たちは、新しい「民主主義」社会について理解し、生きていくための知恵や知識を得る必要があった。

新しい憲法の下で、教育基本法体制による学校教育制度が整備され、実際に動き出すのは１９４８年からであった。さらに、社会教育法が制定されるのは１９４９年、図書館法（１９５０年）、博物館法（１９５１年）の整備が続き、１９５２年に発効したサンフランシスコ講和条約による占領体制の終了まで、とにかく暮らしを再建し、平和で自由な社会を建設するために、人々の思いを託された青年たちは必死に努力を重ね

※１　写真は全て参考文献からの転載
※２　須藤克三（1906－1982）宮内町（現南陽市）に生まれ。山形師範学校卒業。農村文化活動の指導者。山形新聞記者を経て、長く児童文化活動にかかわった。

た。若手の学校教員たちや農業改良、生活改良に関わる人々の関与もあったが、基本的には青年たち自身が悩み考えながら、地域の再建を目指す主体として生きることが求められていた。山形県では、敗戦直後から、多数のサークルやグループが生まれ、活動していたとの記録が残されている。農山漁村の復興に向けて実務的な教育や、家事や裁縫などの技能に関わる学習も取り組まれていたとされる。苦しい生活や地域の人々の封建的な意識との対決を巡って語り合う場には、須藤克三※2（敬称略、以下同様）など文化人と呼ばれた人々の関わりもあった。

さらに、後に『山びこ学校』の著作で知られることになる若き教師、無着成恭※3も炉端に集まる若者たちと語り合っていたという。このような指導者と青年が共に民主主義や新しい地域のあり方について学び合う集まりは夜学などと呼ばれ、早い時期に県内各地に登場していた。こうした青年たちが学び合う場を青年学級と呼び、組織化しようという動きも出始め、全国に広がる。占領政策の下で、全国的な青年組織の結成が認められるのは1951年であるが、山形県における青年たちは、1949年には山形県連合青年団を結成し、活動を繰り広げていた。勤労青年のための青年学級振興法の制定を求める運動も進めていたとされる。

しかし、法案が国会に上程される段階になると、青年学級は新制の教育制度の中で、中学校から高等学校を経て大学へと進学することのできない若者たちに対する安価な教育機会の提供を固定するものではないか、という意見が広がり、1951年に結成されたばかりの日本青年団協議会は激しい議論の末、反対運動に転じた。そうした中、青年学級振興法は制定され、以後、全国で青年学級が開設されることになった。このとき、敗戦直後から学びの場を模索してきていた青年たちは、反対を唱えるだけでは青年の学びの機会の保障にはならないと考え、青年学級の代案として、あるいは青年学級における学びのあり方を方向づける学習方法として共同学習を提唱することになったのである。日本青年団協議会の50年史には、青年たちの戦後の学習活動の広がりの前史として、生活綴り方やサークル活動などを実践し続けてきた山形県・長野県などでの共同学習運動が、その提唱の背景にあったと記されている。

2 共同学習を育んだ山形の青年運動

戦後の青年団は、戦前の社会のあり方の反省に立ち、新しい民主的な地域を創るという大きな使命を持っていたが、青年たちが日々生きていくための課題に具体的に向き合う必要があった。そこで様々な運動に取り組むことになる。例えば、産業開発青年隊運動が挙げられる。これは、農村の人口問題（次三男問題）への対応と地域産業復興のための建設現場での人手不足を同時に解決しようという施策であった。厳しい現場での労働を引き受けた青年たちが（写真3）、宿舎で夜に集まっては語り合うことも多くあった。その小さなグループ活動を小団活動と名付けて、青年たちが悩みやその後の生き方を考える場として大切にしたと記録されている。

（写真3）産業開発青年隊運動、尾花沢青年建設班による野尻川改修工事（1961年）

続いて取り上げたいのは、公明選挙運動として知られた政治学習である。1946年の総選挙で初めて選挙権を行使した女性（婦人）と25歳未満の青年たちはともに、政治参加の手段としての選挙への人々の意識付けと、金品が飛び交う不正をただす選挙浄化運動を展開した。政治についての学習を進め、地域の復興に政治参画は重要な鍵を握っていることを語り、村や町を回りながら語り合う活動を続けた。この活動を、青年団では「小団学習」と呼んでいた。小さなグループでの話し合いを軸にした学びの重要性を、青年たちは婦人たちとともに、実感し、教室ではなく村や町のあちこちで、黒板ではなく、人々が直接向き合うことで自らの課題をテーマとした共同の話し合い学習を展開していた。その学習の手引き書として『学習のすすめ』が1954年に刊行され、初めて共同学習についてのまとまった記述がなされた。ちょうど時を同じくして、日本青年団協議会から『共同学習の手引き』が刊行され、全国の青年たちは共同学習という言葉を自分たちの共通言語として獲得したのであった。それは、21世紀の現在においても、青年団では生きた言葉として使われている。

ここで、共同学習を理論的に整理したのがお茶の水女子大学の教員であり、山形県にも深い関わりのある吉田昇※4であった。吉田は、ジョン・デューイ※5の合理的な思考の方法を援用しつつ、若者が生活実感を大切にしながら、話し合いによって自他の課題の本質に迫り、具体的な仲間との活動によって検証し、さらに新たな課題を見いだしていくという学びの方法を共同学習であると述べた。地域に暮らすあらゆる青年たちが対等に関わりながら共同学習を実践している場として、青年団運動に大きな期待を寄せていたことが理解され

※3　無着成恭（1923−2023）山形市本沢生まれ。山形師範学校卒業後、山元中学の教師として生徒の綴り方を編集した『やまびこ学校』（1951年）は教育学を学ぶ者の必読書。
※4　吉田昇（1916−1979）教育学者。父吉田熊次は東置賜郡中川村（現南陽市）出身で、東京帝国大学の教育学教授、母は井上哲次郎の娘。
※5　ジョン・デューイ（1859−1952）アメリカの哲学者・教育学者。『民主主義と教育』（1916年）等の著作は現在でも世界の教育に影響を与え続けている。

る。なお、この時期の共同学習を巡る論考は、青年たち自身によるものや研究者によるものなど数百件を超えており、今もその全容は究明されていない。

3 多様な活動の中で継承されてきた共同学習

このように全国的な運動として提唱され、繰り広げられた共同学習であったが、具体的には、生活の改善や産業の復興を求める学習、平和学習、そして青年問題研究集会や女性たちが主体となった研修会などがその集約の場としての役割を果たした。定期的に集まっては、生活や職場において自分の困っていることなど、抱える思いを語り合い、そこから共通に向き合うべき課題を見つけ出し、一人では取り組めないような行動を起こし、改善のための方策を提言する、あるいは政治の場に参画していく等、様々な場面で青年たちは共同学習を行い、その中で生き方をつかみ取っていった（写真4）。青年から成人となり、多様な思想や信条により異なった立場を得たとしても、どのような仕事や役割においても、青年団での共同学習を経験したことは生かされてきた。つまり、社会的立場や政治的な立場が異なり、時に激しく対立してしまうことがあっても、「人間として生きる存在そのもの」を認め合うことを基盤として、共存の社会を創り上げてきたのではないだろうか。

（写真４）山形県女子青年の集い
（1989年筆者も参加）

おわりに

共同学習を経験した青年たちは、日本の平和を守り育ててきたとも言えよう。「二度と銃をとらない」という決意の下で、話し合いを中心にして、自らのこととして地域や社会の課題に取り組み、それを政治にも反映させていく。青年たちが敗戦直後から高度経済成長期までにそうした共同学習の経験を共有してきたことの意味は、今、戦後80年の中でしっかりと評価される必要がある。共同学習は、その後も、社会の変化に対応しながら、今でも継承されている。戦後の創生期に関わった人々は、ライフステージ毎にそうした場を創る視点を有してきた。例えば、子ども議会、若者会議、コミュニティ・カフェ、居場所、そうした発想は全て、共同学習に通じている。今注目される「哲学対話」や「コミュニティ・パブリックライフ」も同じ発想を持つものであると思われる。

具体的な課題を自分たちで探り出し、行動を起こし、また語り合う、そのサイクルの継続は、大学も含めた学校教育現場で現在重視される「アクティブラーニング」や主体的な学びそのものである。ようやく、社会教育の取り組みが教育界全体の本質として捉えられる時代となった。残念なのは、社会教育の共同学習が人々にあまり知られていないことである。

青年団や婦人会が進めた共同学習は過去の歴史として語られるだけではなく、現在、そして未来をつくり続けていくために不可欠なものである。そのことの意味に、青年団や婦人会を経験した人、コミュニティ活動を維持してきた人、青年議会や子ども議会を作ってきている人々は気づいているはずだ。日本の人々が各所で展開してきた「共同学習」は、日本社会に他者を思いやる平和で安全な文化を根付かせ、維持することに貢献してきたのではないだろうか。そして、ＡＩ革命による激動の時代であるからこそ、人々の対話による学び合いの場が重要であると多くの人々が述べている。同じことは、Ｚ世代も気づいている。語り合う共同学習の場づくりとその持続に地域の存亡はかかっているのではないだろうか。

＜主な参考文献＞
・山形県青年学級連絡協議会編『青年学級の宝典』１９５５年
・高桑喜之助編『稿本　山形県連合青年団史』豊文社、１９６２年
・山形県連合青年団20年史編纂委員会編『山形県連合青年団20年史資料集』１９７０年
・日本青年団協議会編『地域青年運動50年史―つながりの再生と創造―』２００１年
・山形県青年団ＯＢ会・矢口徹也著『山形県連合青年団史―メディアでたどるやまがたの子ども・若者・女性―』萌文社、２００４年

矢口 悦子
プロフィール

秋田県生まれ。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科(博士課程)単位取得満期退学。博士（人文科学）。専門は社会教育学・生涯学習論。2003年に東洋大学文学部教授として着任。社会貢献センター長や文学部長などを経て、2020年から学長に就任。現在日本私立大学連盟理事等も務める。日本青年団協議会の助言者として長く青年たちの運動にかかわった経験を有する。なお、大学の卒業論文は山形県の青年団の共同学習をテーマとした。

21

あなた
やまがた
たからびと

interview

土屋明美（つちやあけみ）さん やさい畑 i-make(白鷹町)

県内で自ら学び続け、いきいきと活躍している方を「たからびと」として、インタビュー形式でご紹介します。今回は、トマト農家への憧れから新規就農し、農業をツールに地域の方や学生を巻き込み地域づくりに取り組む、土屋明美さんにお話を伺います。

―農家になったきっかけ

私は福島県出身で、結婚を機に白鷹町中山地区の主人の実家の旧宅で暮らし始めました。核家族だったので、近所の皆さんがいろいろくださったり、面倒をみてくれたり。たまたま一番近いお家のトマト農家さんにトマトをコンテナでいただいたことがありました。実はその時の私はトマトが大嫌いで…。でも食べなきゃ失礼だと思って食べたら、すごく美味しい！　どうしてスーパーのトマトと味が全然違うのか美味しさの秘密を聞いたら、うちで作っているからとのこと。そこから興味が湧いて、畑をたずねるようになり、汗をかいて働く農家さんのかっこいい姿に憧れて、思い切って夫に相談したら、人生1回きりだから好きなことしたらいいんじゃないのって。それからその方のもとで2年程研修させてもらい、その方が農家を辞めるタイミングで、畑の一部をお借りして備品や道具もいただいて、新規就農ができたんです。嫌いだったもので人生が変わっちゃったんです（笑）。

自分が作ったものが形になる農業はすごい仕事。手をかけた分がはっきりと味や収量に出ます。トマトは自分自身を反映するもの。地域活動も含めて、頑張ってる姿を見せて、私もそんなことをやりたいって思ってくれる人が増えるようになれば嬉しいです。

―美味しいトマトを届けたい！

すんなり就農したものの、管理はほぼ一人。3人目が生まれてすぐの独立で、家のことも子どものことも仕事も、責任を持ってやらなきゃと、子どもが起きる前から仕事をはじめ、学校に送り出して仕事をして、子どもたちが寝てからも仕事をして、無我夢中でやっていたら身体は壊すし喧嘩はするし、何もうまくいかなくなって、働き方を変えなきゃと。とにかく寝る時間とご飯を食べる時間、子どもたちと会話する時間を確保するようにしました。それでも母親らしいことをする時間がなかなか持てなくて申し訳ないと思っていたんですが、子どもたちが、うちのママがこういう仕事をしてるの、かっこいいって誇らしく思っていてくれたことがわかって。子どもたちにとっていいならそれでいいやと思えて励みになりました。

作っているのは大玉トマトの〝りんか〟という品種。最初は市場出荷でしたが、それだと硬めのトマトを追熟して店頭に並べるため、味も香りも足りない状態になってしまう。それで、自分が美味しいと思ったものを食べたい人に直接届けたいと、樹上完熟の一番おいしい状態を個人販売するようになりました。そして、1個も捨てたくないので、完熟のフレッシュトマトを加工してトマトジュースも販売しています。ただ、販売も加工も全く知識がなかったので、実際自分で全部売るとなると、やっぱりすごく大変で。でも、お客さんがお店を紹介してくれたり、加工場を探してくれたり、配達時間がずれても大丈夫って言ってもらえたり、家族やお客さん、周りの人に甘えさせてもらって今があります。本当にありがたいです。

―農業体験を通した地域づくり

白鷹町に住んで好きなことを続けられるのも、支えてくれる人たちがいて、中山地区があるから。それで、私も地域のことを何かできないかと思うようになり、トマト畑と義父の棚田で、5月にトマトの苗植えと田植え、7月にトマトの収穫体験、9月に稲刈り体験と4回のイベントをしています。東北芸術工科大学の有志の学生さんや、地域のお母さんお父さんにも手伝ってもらって、そこに集まった人が交流する場になっています。体験のコンセプトは『つくる⇓たべる⇓感動⇓応援』のサイクルづくりで、応援＝購入してもらう・白鷹町に来てもらうという目的が入っています。他にもやりたいことがいっぱいあります。例えば、しらたかマルチワーク事業協同組合で、季節で忙しい農家さんに人材派遣ができる仕組みを地域おこし協力隊の方と一緒に進めています。それから、他の農家さんの市場出荷できない野菜を集めて加工品を作っていくような流れも作りたいと思っています。私にとって、自分と周りの地域が幸せになるツールは農業やトマト、そこから輪を広げていきたい。地域の課題は一緒だから、いろんなところに自分の得意なことをやるチームができると、地域が継続していきやすいのかなと思っています！

やさい畑i-make
ホームページ

このまちに注目！

地域の取り組みを紹介します

金山町

主催:金山町　共催:(株)リトプラ、(株)セガ エックスディー
協力:最上地域みんなで子育て応援団
デジタルアトラクションイベント「あそび×まなびパーク powered by Little Planet」

子どもたちが心躍る体験を！

■事業内容■

町制施行100周年記念事業と町のDX推進事業のコラボ企画として、普段は体験できないような、心躍るわくわくする体験を多くの子どもたちへ提供したいという思いから生まれたデジタル映像を活用したイベントです。町のDX推進事業のアドバイザー（株）セガ エックスディーをコーディネーターに、「テクノロジー」×「遊び」の次世代型テーマパーク「リトルプラネット」を運営する（株）リトプラのご協力により実現しました。砂の形状に合わせて山や海が出現する「SAND PARTY」、人の動きに応じて映像が動く「DISCOVERY GARDEN」など、当日は800人超の来場者が夢中になって楽しみました。

■ここが大変■

たくさんの子どもたちに楽しんでいただきたく、イベントPRを幅広く行ったのですが、どれくらいの来場者になるか正直読めませんでしたが、結果、最上管内はもちろん庄内、置賜地方からも来ていただくことができ、会場は大盛況でした!

■ここがうまくいった■

最上管内の行政・子育て関係機関で組織する「最上地域みんなで子育て応援団」を通じてイベント周知を行い、当日の運営スタッフも保育士等のプロの皆さんが子どもたちをリードしてくれたことが運営をよりスムーズにしてくれました。

参加者Voice

・金山町でゲームセンターよりすごい遊びができて嬉しいです！ずっと忘れない思い出になりました。（9歳、小学生）
・ジャンプすると葉っぱや花びらが動いてビックリしました。砂場で宝を掘って見つけられて嬉しかったです！（5歳、園児）

寒河江市

寒河江市教育委員会
寒河江市高校生ボランティアサークル「チェリーズ」

「チェリーズボランティア　三方よし」自分によし 相手によし 地域によし

■活動内容■

「東海大山形高校の女子生徒が、小児がん支援のために立ち上がったんだって。チェリーズもやってみない？」という会員の声が契機となり、一昨年9月に寒河江市文化センターで行われた「山形県民芸術祭」の場をお借りして、「小児がん支援 山形レモネードプロジェクト」を初めて行いました。また、依頼を受け今年度は「寒河江市福祉と健康フェア」の場で開催しました。このように、自分たちの企画立案と、市や福祉関係団体からの依頼の2本立てで行っています。他にも、小さな子どもと関わる「ネイチャーゲーム」や、図書館まつりでの読み聞かせ、赤い羽根募金など、地域の方々と関わり合いながら、「自分たちがやりたいこと、そして自分たちができること」をモットーに活動しています。

■ここが大変■

学校も学年も違う仲間が、一堂に集まる難しさを感じます。また、中学生から高校生と年齢の幅が広く、考えの違いを認め合う大変さを痛感しています。これからも仲間とともに、ボランティアの喜びを分かち合いながら活動していきます。

■ここがうまくいった■

チーム一丸となって活動すること、そのためには、相手の身になって行動することを心掛けています。その結果、お互いにカバーし合い、助け合いながら活動できるようになりました。

活動者Voice

地域を支えたい、盛り上げたいという思いから、懸命にボランティアに参加しています。人と人を結び付けてくれたボランティアを通して、仲間と活動できたことは私にとって宝物です。（専攻科2年）

山形県生涯学習センター事業報告

令和６年度　生涯学習・社会教育関係職員パワーアップセミナー

（村山会場）５月16日（木）遊学館第一研修室
（庄内会場）５月17日（金）庄内総合支庁講堂

昨年度までの要望を受け、今年度は村山と庄内の２会場で開催しました。１会場あたりの人数が少なくなった分、受講者同士や講師との距離が縮まり、和気あいあいとした研修となりました。

講義では、社会教育の理念や基礎知識、法令やマネジメントの基本について学びました。事例発表では、市町村による中学生が企画･実施する体験プログラム活動について、報告がありました。グループに分かれての「熟議」の演習では「これからの山形をつくる人たち（子どもたち）に伝えたい『山形らしさ』ってなに？」をテーマに、活発に、そして楽しく意見交換が行われました。最後に熟議の結果をまとめると、村山会場と庄内会場で地域の違いが表れ、大変興味深い結果となりました。

参加者の声

- 教育と学習の違い、生涯教育と社会教育の違い等、わかりやすかった。
- 事例報告は自分の市町村で活用できそう。
- 本日受け取った気持ちを持ち帰って、地域に生かしていけるような仕事をしたい。
- 誰もが気軽に臨める「熟議」は大変有効だと思う。

高齢者生きがいづくり・生活支援活動人材育成等事業 生活支援コーディネータースキルアップ研修　初任者研修

６月12日（水）遊学館第一研修室

高齢社会の生きがいづくりや地域の支え合い活動を広げるため、地域福祉関係者が地域でつながりをつくる技術や手法、心構え等を講義や事例紹介、グループワーク等で実践的に学ぶ研修会を開催しました。午前中は、地域福祉関係者が地域の方々と打ち解けて仲良くなるためのアイスブレイクを学んだり、日々感じている課題や悩みを共有し解決するグループワークを行いました。午後は、出向くとよい場所や自分の味方となる周りの人財について再確認するアイディア出しの後、明日から何を始めるか考えていきました。まとめの講義では、地域福祉はエピソードで語ること、人とつながるためには自己開示が必要なこと、無駄話も重要なこと、協働は個人と個人のつながりから始まること､高齢者への声がけやアプローチの際の心構え等を学び、大変有意義な研修となりました！

参加者の声

- やるべき仕事が明確になりました。
- できることからはじめること。とても気持ちが楽になりました。
- 今まで自分がしてきたことは間違いではないと、背中を押してもらえました。
- 悩みを共有でき、講師や参加者の意見を聞くことで、悩みを前向きな方向に転換することができました。
- 様々な方とつながりが持てたことで、今後様々な場面で相談できる相手ができました。

山形県地域づくり実践交流集会「民俗芸能に学ぶ地域づくり～人のつながりのつくり方～」

12月８日（日）遊学館第一研修室

毎年テーマを変えて開催している本交流集会｡今年度は、民俗芸能から地域づくりのヒントを探りました！第1部の事例発表では、鮭川歌舞伎保存会のお二方から、戦中戦後に衰退してしまった村内の4座の地芝居（歌舞伎）を1つにまとめ、保存会を結成して活動を続けている歴史などについてお話しいただきました。第2部のトークセッションでは､フロアを交えながら活発な意見交換が行われました。座員の半数が青年層である理由の一つとして、村全体で小学生の頃から民俗芸能を伝承する体制が整えられていることが挙げられました。また、6月の定期公演の前に行われる1ヶ月にわたる毎晩の練習と飲み会が、仲間づくりの場にもなっていることが語られました。一緒にいる時間や共有する時間が長いほど絆が強まり、他のさまざまな地域づくり活動で円滑な連携・協働が可能となっていることが分かりました。

参加者の声

- 自分の地域には伝統芸能が少なく、いつも憧れを持っています。オーディエンスでもいいのだと知り、今後いろんな所に参加したいと思いました。
- 伝統芸能を通した循環型の人材育成について考えることができました。さまざまな立場の方からの具体的な話題が参考になりました。
- 音楽教育に携わっております。民俗芸能には音楽が欠かせないという思いで参加させていただきましたが、改めて「人と人をつなぐ」役目の大切さについて考える機会となりました。

Information Space

【山形県生涯学習センター助成事業の実施予定】

山形県生涯学習センターでは令和７年度も県内の皆様の多様な生涯学習活動を応援するため、下記の助成事業を予定しております！
是非ご活用ください！

３月中に詳細を HP に掲載します。
http://www.gakushubunka.jp/yugakukan/promotion/

助成事業	青少年地域学習活動支援事業	やまがた地域創生事業
対　　象	高校生	市町村・施設・民間団体または生涯教育関係者
助成対象事業	高校の課外活動として行われる地域学習や地域づくり活動	①地域社会の課題解決につながる事業 ②山形県についての知識を活用した地域づくりのための事業
募　集　数	８事業程度	16事業程度
募集期間※	４月１日～６月13日（予定）	４月１日～５月９日（予定）
事業実施期間	2025年４月１日～2026年２月28日まで	
助 成 金 額	助成の対象となる経費又は５万円のいずれか低い額	助成対象経費の３分の２（市町村は２分の１）又は18万円のいずれか低い額
助成対象経費	講師謝金・講師旅費・賃借料・消耗品費など	

※交付決定事業が募集予定に達しなかった場合は二次募集を行います。内容が変更になる場合がありますので、ホームページをご確認ください。

～洗心庵からのお知らせ～

■第11回洗心庵写真コンテスト入賞作品展

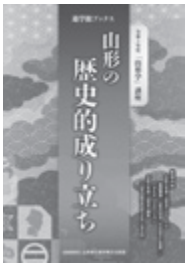
今年度応募作品から入賞作品が決定！下記日程で展示会を開催します。平成26年度第１回写真コンテスト入賞作品18点の展示会も同時開催。春風の中の庭園散策もかねて、是非ご覧ください。

日　時　３月18日(火)～30日(日)
　　9:00～17:00
場　所　多目的ホール
　　(入園・入館無料)
問合せ　洗心庵（下記）へ

洗心庵ホームページ

■遊学館ブックス最新刊
『山形の歴史的成り立ち』３月中に発刊します！

令和５年度「山形学」フォーラム・講座（全５回）の記録集。山形の中世・近世を中心に歴史や民俗的な視野に立ち各地域の成り立ちを振り返り、そこに生きる人々の歩みや暮らしを見つめ直した、充実の講議録です。



山形県生涯学習センター（遊学館３階）・文翔館・洗心庵、こまつ書店、八文字屋書店、戸田書店山形店、Amazonで販売予定。発刊後はお近くの公立図書館でもご覧いただけます。

Ｂ６版
価格1,100円（税込）

「遊学館ブックス」バックナンバーはこちらから！
https://www.gakushubunka.jp/yugakukan/publication/

編集後記

山形県の青年団の歴史については、世代によってはご存じない方も多いのではないでしょうか。実を言うと、私自身も現職に就くまで「青年団」という言葉を耳にしたことはあったものの、その具体的な活動内容や歴史についてはほとんど理解していませんでした。今回の特集を通じて、若者たちの取り組みが地域の未来を切り拓く大切な活動であることを改めて実感しました。表紙のチェリーズをはじめ、県内の若者たちの活動に今後も注目していきたいと思います。(R)

読者プレゼント

「生涯学習やまがた」をご覧いただいている皆さまに、感謝の気持ちを込めて、抽選で3名様へ3月発行予定の遊学館ブックス最新刊『山形の歴史的成り立ち』(1,100円)をプレゼント!左記の山形県生涯学習センター広報紙担当あてに【①お名前・ご住所②入手場所③興味を持たれた記事④内容についてのご感想・ご意見・ご要望】を添えて、はがき・メール・FAXでご応募ください!締め切りは4月末です。当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

編集発行（公財）山形県生涯学習文化財団　令和７年３月発行

山形県生涯学習センター　〒990-0041 山形市緑町1-2-36［遊学館］
TEL 023-625-6411（貸館専用TEL 023-676-7182）FAX 023-625-6415
E-mail yama@gakushubunka.jp
URL https://www.gakushubunka.jp/yugakukan/
開館時間　9:00～21:00［夜間利用が無い場合は20:00まで］
休館日　第１・３・５月曜日、第３日曜日、年末年始

洗心庵［山形県生涯学習センター分館］　〒990-0041山形市緑町1-4-28
TEL 023-664-2800　FAX 023-664-2816
開館時間　9:00～21:00［夜間利用が無い場合は19:00まで］
［12月１日～３月31日までは夜間利用が無い場合は17:00まで］
休館日　毎週月曜日、毎月第３日曜日、年末年始

「生涯学習やまがた」
バックナンバーはこちらから！